

戦争で失った父母と家・戦災孤児の救出

戦争は終わったが、戦争で父母や家を失い、浮浪児化した戦災孤児らの存在が社会問題化した。しかし、生活にゆとりがなく見て見ぬふりの人が多かった。そんな中、ラジオから孤児を扱った「ガード下の靴磨き」「鐘の鳴る丘」の歌やドラマが流れた。戦争で行方不明になった肉親や友を探ず「訪ね人」の時間もあつた。

孤児たちの光となり、戦後を支えた3人を紹介する。

「鐘の鳴る丘」を聞いて・戦災孤児の父」品川博

1946年(昭和21) ^{さんごかい}珊瑚海のニューアイルランド島から復員し



「鐘の鳴る丘」のどんがり帽子をまねて建設された「少年の家」 藤崎康夫著『愛と勇気の鐘—孤児たちに一生をささげる品川博の愛の奇跡—』くもん出版刊

た品川さんは、焼け果てた日本と、親を失い、住むところもない戦災孤児の群れにびっくりした。当時、日本には約13万人の戦災孤児がいた。

NHKドラマ「鐘の鳴る丘」はGHQの浮浪児対策からつくられたという。品川さんは、孤児たちに家と教育と職業を確保するために「鐘の鳴る丘」のような「少年の家」をつくった。

戦災孤児のよりどころとなった「少年の家」から多くの子どもたちが救われ、世界へ羽ばたいていった。

戸籍のない子を育てる「ママ」・石綿さだよ

始まりは、飢えた戦災孤児の様子を見ぬふりできず、家で保護したのがきっかけだった。やがて自宅を開放し、1947年(昭和22)戦災孤児の家「愛見の家」を作った。当時106名の子どもの母となり、^{ひっぽく}経済的逼迫が続く中、懸命に育てた。

親を失い自分の名前も知らない子達に戸籍を作り、教育を受けさせ、更生させた。1,000人の戦災孤児を養育し、「ママ」と呼ばれ慕われた。



「エリザベス・サンダース・ホーム」旧岩崎家大磯別荘につくられた。

混血児の母・沢田美喜

^{しんちゅうぐん}進駐軍の常駐は、日本に新たな課

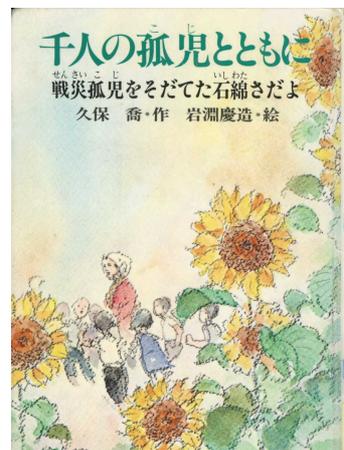
題をもたらした。アメリカ兵と日本人母との間にできた混血児の存在だ。父親がアメリカへ帰国すると、母子は路頭に迷った。特に、黒人との混血児は、世間から冷たい目で見られ、浮浪児化し、社会問題となった。

混血児問題に救済の手を差し伸べたのが、沢田美喜である。実家の岩崎邸を進駐軍から買戻して、混血孤児院「エリザベス・サンダース・ホーム」をつくった。混血児への偏見と蔑視打破・里親を求めて世界を走り回った。沢田美喜著『黒い肌と白い心』に詳しい。



『愛と勇気の鐘 孤児たちに一生をささげる品川博の愛の奇跡』

藤崎康夫著 くもん出版刊



久保喬著『千人の孤児とともに 戦災孤児をそだてた石綿さだよ』

PHP刊